相模経済新聞　2023年6月12日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

57

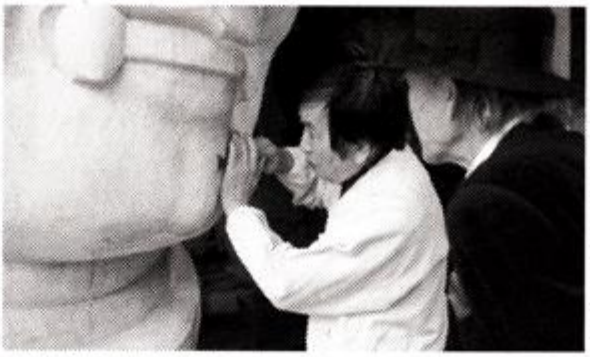
大仏師、松本明慶師の世界

地球上の生物量を重量で比較すると、その95%以上が植物である。植物は、基本的に移動することがなく、一旦大地に根をはると、長短の違いはあっても生涯その場であらゆる環境変化を受け入れて、生き続ける。樹木の中には、数千年という長い年月を生き続けるものもある。大樹の前に立つと、その樹が放つ生命力やオーラを感じ、荘厳な気分になる。仏師とは、木の中から仏の魂を彫り出す人たちといえる。

この度、現代随一の大仏師、松本明慶さんの京都にある工房と明慶仏像彫刻美術館を訪ねる機会を得た。

明慶さんは、1945年、京都三条大橋近くの生まれの77歳。17歳の時（62年）、仏師を志し、作風は運慶・快慶の慶流を受け継いでいる。明慶さんは、文藝春秋2023年5月号のグラビア「日本の顔」に登場され、正に時の人である。

私は、人間の精神活動も含めて、全ての生命現象は、化学反応であるとする立場で、「宇宙生命哲学」という概念を世に広めている。大仏師と宇宙生命哲学者が対面した時に、どのような反応が起こるのかというのが、今回の企画の主旨であった。



松本明慶大仏師の手元に見入る著者
（2023. 3. 30於 明慶工房 伊藤洋佑撮影）

明慶さんは、一介の木彫り職人として作像に励んでいるといわれる。素材となる一本の木に対峙し、その木が過ごした生涯に思いを馳せ、その木の中に仏の姿を見出した時に制作に取り掛かり、一気呵成に作品を仕上げてしまうという。その時は、まさに仕事の鬼となって、何者をも寄せ付け難い精神状態になるという。「鬼が云う」と書くと魂になる。作者が鬼となって木の中に仏を見出して作り上げた作品の中には、魂が宿っている。明慶さんが彫った鬼の表情には、心休まる優しさがある。人間の心の中には仏の心と鬼の心が共存している、と明慶さんは語られた。

世の中には、あらゆる場面で、魔界からの誘惑が渦巻いている。その誘惑に負けずに、精神的に豊かな生活を送るためには、仏心と鬼心との間で、バランスの良い化学反応が起こると良い。植物と違い、動物は植物のパラサイトとして生きる宿命をもち、常に不安に駆られ、動き回り、ひと時も気が休まる暇がない。生き残ることに必死な人間が、心の平安を求めて、木から彫り出された仏像に惹かれる心情がよく理解できる。明慶さんとの会話の中で、宇宙生命哲学に通ずる尊い教えを学ぶことができた。